

証言を寄せて下さったのは、民間人、沖縄県出身の兵士、本土出身の兵士、鉄血勤皇隊、女子学徒隊、護郷隊、防衛隊など。地域は本島南部、本島北部、慶良間諸島、伊江島、石垣島など沖縄全域にわたります。

● ひもじいのは分からなくなっても喉は乾いた。2、3日経つと水が欲しくて、釘を見るようになった。海面に水缸が見える。「ああ、水だ、水だ。」いかにだの上に雲も見えた。(沈没した対馬丸に乗船、当時11歳)

● 私の方は大変結構で、母が綺麗な服を着せると、ああもう殺されるんだなって身をもって覚え上げたとね、外のはうへ飛び出して行くんです。「私は死なない、死なない」と、そういうことが何回も繰り返されていきました。(原岡味島、当時5歳)

● 友達のお母さんは呼びながら山から駆け下りた家に入るど血だらけ。肉もあつちの髪こつちの髪頭はこつち。腕の部分はこつち。手狂乱になつて子供の体を捜すおばさんよ、「これトシコの腕だよ」と言っても何も答えなかった。(当時11歳)

● とにかく敵が憎かった。「ちきしょう、ヤンキーぶっ殺してやる」村撃を始めて撃ちまくって。そうしている間に連撃砲がきて、目の前で青光りしたと思つたら、ドービとなって、頭の中が真っ白になつた。破片が目に入った。眼球が出ちゃつた。後で教えてもらったけど、目が飛び出ていたらしい。(歩兵第89連隊、北海道出身)

● 「看護婦さん、おにぎりくれたら死んでもいい」と懇願された。あつちから、こつちから言われた。ナゲエラの球は地獄。排尿は全部座ったままするので、200人が血だらけで、血が滲いている。(瑞泉学徒隊)

● 沖縄出身の若い兵隊が、「このままでは生きていかれませんから捕虜になりましょう」と言つた。日本兵2人が出てきて、「こんなやつがいるから」とこの捕虜の首を切つた。他にも若い兵隊の首を切つた。他にも捕虜にならうと話し合っているおじさんたちがいて、「女の人は荷物を置いて、男はふんどしになって捕虜にならう」とズボンを下ろしかけていたが、若者が殺されるのを見て慌てて上っていた。(当時15歳)

● 未婚者からの声 (2015年現在)

戦争という言葉は知っていますが具体的なことは分からず、今まで来ませんでした。今までも聞いたことがあったかもしれませんが、いつになく心に響きました。(30代女性)

ごく普通に生きてきた娘さんがある日戦場と化すことは恐い。お話を聞いて戦争で命を落とすのは本当に紙一重なのだと思つた。(10代男性)

私も浅草で3歳の時戦争に会い、(東京大空襲)人事と思いません。(70代女性)

沖縄戦の恐ろしさ苦しさを紙で書けることが出来て、本当に良かったです。(20代女性)

悲しく、怒りを覚えます。(60代男性)

沖縄戦も歴史の物語になり忘れ消えてしまわないように、その場にいなければ感じない、分からない体験証言をあつちのまま絶対に伝へていなくてはいけません。(30代女性)

戦争というのは紙だけでなく、味方同士でも血のにじみ合いたというこを身をもって感じた。(20代男性)

【戦場体験放映保存の会について】

- 2004年12月に設立。アジア太平洋戦争の戦場体験を主にビデオ証言として後世に遺す活動を行っています。主に元兵士・軍属の方々、沖縄や敗戦時の満州など戦場となった地域におられた民間人の方々からの聞き取りを行っています。体験者自身が呼びかけの先頭にたち、戦争を知らない世代のボランティアが収録活動にあたる若者一体の活動を展開中です。

イベント予告 “語らずに死ぬるか！”の元兵士たちが語る戦場の真相を聞きに行こう

戦場体験証言集会・シンポジウム

日時：2016年9月4日(日)午後1時開始(12時間開場)

会場：大塚・中之島公会堂 [入場無料]

詳細は戦場体験史料館 (<http://www.jvvp.jp>) をご覧ください。

保存の会は「無色、無顔、無名」を強く申し合わせています。どんな立場の方も、どんなご意見の方も、ただ、戦場体験を語り継ぐ一点だけで手を繋ぎたい、歴史を正確に遺しておきたいと願っています。